
I f y o u w a l k w i t h t h e d o g

車海老

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If you walk with the dog

【Nコード】

N6135K

【作者名】

車海老

【あらすじ】

少年には親愛する兄がいた。その兄は今日、結婚して婿となり、他人の家の息子になる。少年は弟として、最後にその家の犬の散歩をして、役に立とうとする。そして、少年は男と出会った。

「一時は蔵もどうなるかと思ったがのお、経営は上向き、お嬢さんも結婚して、こりゃあ安泰じゃなあ」

「なんじゃったつけ、うえぶでざいなーの兄ちゃんはおらんのか？兄ちゃんの作ったほーむページで買つてく人が出たけえ、今わしらはこうして辞めずにすんどるんじゃろ」

「あの兄ちゃんはなあ、旦那さんが呼ばんかったんよ。お嬢さんと変な噂たつたじゃろう」

「そっぴゃああったのお。まあ、結局それも噂よ。お嬢さんのあの顔見てみいや。あんな幸せそっぴゃあ並んで座つとるで」

「今日はよく来てくれたな」

新調されたばかりの和装束を纏った、少年の兄はうれしそうに言った。兄は酒を飲まされているはずだが、そのようには見えない。

身丈百二十センチほどの小さな少年は、今になって兄とようやく話すことができた。それは、今日、兄の周りに知らない大人が次々と集まり、祝いの言葉をかけていたため、近づきづらいものがあつたからだ。少年は、肉親として、兄弟として、そしてその存在に憧れる後輩として、今日で少なくとも百回は兄が聞いたであろう言葉を贈った。

屋根の大きな家、大きな酒蔵、酒蔵を管理する数多くの職人たち。兄の結婚式場であり、仕事場であり、家となる大きな敷地の中には、一般的なものより大きい、多い、もしくは高価なものが用いられている。

そして今日、少年の兄も、この家の者になった。

少年と兄の年は十歳以上離れているため、生きる世界は大きく違う。背格好も、成熟した大人である兄と、まだ成長期にも入っていない弟では、等身の違いがある。加えて、兄は頭で考えるタイプだが、

少年は体で行動するタイプだ。

それは傍から見ると、どこかチグハグな兄弟だった。そんな兄弟だが、少年は兄が大好きだったし、純粋に尊敬もしていた。そして、兄もまた、少年には弟としてではなく、一人の人格として接していた。二人の間には、友情にも似た繋がりがあった。

そんな兄が、今日で別の家の息子になる。この酒蔵の婿となるのだ。他人の家の息子になることで、自然と会う機会も減る。少年には、そのことへの悲しみと寂しさがあった。

しかし、好きな人というためには仕方ないことなのだ。兄にそう諭されて、我慢しようと、少年はそう思った。

その兄と結婚するのだから、花嫁はこの上なく幸せな人なのだと少年は思う。花嫁はいまとても幸せに違いない。たくさんの大人に囲まれており、あまり話すことはできなかったが、その見たままに、幸せそうだった。

気の合う同年代のいない、宴の席に居心地の悪さを感じ、少年は抜け出した。兄は、それに気づいて来てくれたらしかった。そのことはうれしかったし、少しだけ悔しかった。兄に自分は最後まで迷惑をかけている、そう思ったからだ。

母屋と離れを繋ぐ渡り廊下に腰を下ろしたまま、傍らに立つ兄のために、自分が何かできることはないだろうかと、そう考えていた。獣が恨めしそうに鳴く声が聞こえたのは、そんな時である。

「普段なら、アイツが散歩に連れて行くんだが、こんな日だろ？」

誰かに宴を途中で抜けてもらうなんて無粋な真似もできないし、今日は我慢してもらうしかない」

少年は考えた。この声からして、間違いなく犬である。犬はこの家で飼われている。犬は今、散歩に行きたがっている。しかし、この家で犬を散歩に連れて行けるものはいない。

……自分を除いては。

「いいのか？」

思いついた瞬間、弟は兄に、そう提案した。もちろん構わないと

答えた。

今度は、大丈夫かと、確認をとってきた。もちろん、大丈夫であると答えた。

兄は腕を組むと少しだけ考えた。そして笑顔になって、少年の頭をなでた。

「大きくなつたな」

少年は、兄に認められたこと、そして最後に弟として、役に立たことがうれしかった。

しかしこの時、少年には理解できていなかった、なぜ散歩一つ任せるのに兄が躊躇する必要があつたのかを。少年は自分があまり頼りにされていないと考えていた。

少年は知る由もなかった。直接目にするその犬が、少年の想像していたものよりも、二周りは大きかったことを。

今日の絵日記は緑の色鉛筆を手放せないな、若干、年不相応、性格不相応のことをしている少年は思った。

それほど、緑が栄えている。遠くを見ても近くを見ても。

ほぼ散りかけた桜が僅かに見える山は、緑の塊でしかない。

酒の原料となる稲が植えられたばかりの田からは、都会暮らしの少年が嗅いだことのない香りがした。その香りは少年をより深く緑の中へと誘い込む。

酒は、よい水とよい米が調達できてこそできる。よい地酒があると、全国的に有名になりつつあるこの土地は、特に恵まれた自然にあるということだ。

その中を、一匹と一人は歩いている。一匹は喜々として、一人も元々は仕事として始めたことだったが、新鮮なものが次々と映るその光景に、気付けば夢中になっていた。

犬は大型犬だった。少年は最初、兄の手前問題ないような素振りを見せていたものの、動揺していた。自分よりも大きな犬がいるという事実、生態系の広大さを如実に感じた。一人きりになった瞬間に食われるとすら思った。

しかし、実際に散歩してみても分かったことだが、この犬は大人しく、よく躑けられた犬だった。そのこともあり、少年はただ散歩をこなすだけでなく、楽しむ余裕すら生まれていたのだった。

先ほどまでいた屋敷の屋根が、はるか後方で爪ほどの大きさになる場所まで来た。もうじき、見えなくなってしまう。少年は心細くなり、そろそろ帰ろうかと考えた。

しかし、ここに来て犬がのっそりと、ゆっくりと主張を始めたのだ。その体軀から引き出される力はあまりに強く小さな少年の手には余った。

しかし、少年は親愛する兄に、任されたのだ。手綱から、手を放すことは許されなかった。犬に引きずられていった。

そうして、どのくらい歩いただろう。

もう、帰り道を覚えるという作業は諦めていた。誰かにあつたら助けを求めようと決め、今は大人しく犬についていこうと決めていた。犬は、どこへ続くのか分かっているかのように、躊躇なく道を進んでいく。

今、少年は、一人きりにならないために、手綱をしつかりと握って犬についていくことにしている。この光景を見た者がいたとしたら、そのまま少年が犬を散歩していると受け取るだろう。

しかし、今は犬の方に主導権がある。ある意味、その手綱は少年の首に巻かれているようなものであり、犬が少年を散歩しているようなものだった。

ようやく、少し開けた場所に出た。看板を見るとどうやら町が近いらしかった。遠くに映るその光景は、市寄りの町ではなく、村寄りの町だった。少年は、安堵した。

その瞬間、また犬は脇道にそれていった。少年はここ一番の力を出した。このままでは、自分は遭難してしまうと考えたからだ。子供は想像力が豊かだ。実のところ、ちゃんとした道は続いており、その先に一軒の家があつたのだが。

家には、人が住んでおり、表がなにやら騒がしいことに気づいた。

窓から覗くと見慣れた犬と、見慣れない少年が戯れている。向こうは気づいてないようなので声をかけてみる。

「……お前、何してんの？」

少年は、どうしたことか、自分に助けを求めてきた。

「家の窓から、見慣れた犬がいるのが見えてな。いつもコイツを連れてたアイツ、今日はどうした？」

普段犬の散歩をしている花嫁は今、式の最中であり、自分はその代わりに来ていると正直に答えた。

少しの驚きと、どこか達観した感じをさせた男に、少年はある疑惑を浮かべた。この男は、兄の花嫁と近い間柄にあり、兄の幸せの妨げになるのではないかと。

男は少年の視線に気がついたのか、それにつまらなそうに『俺はただ、ここにいただけだ』とだけ答えた。

犬はあくまで我がままに前足を上げると、男に体重を預けた。男は、それに慣れた感じで接する。その様子を少年が興味深く見ていくと。

「この犬は、もともと俺が飼っていたからな」

一人で住むには広すぎると、自宅を仰ぎ見た後。

「病気だったお袋は犬が好きでな。元気づけのために飼ってたんだ。まあ、散歩に行く前に、あっちに逝っちまったが」

少年がやってきた方向を、目の前の犬を、そして、自分の周囲を眺めた。最後に見上げた空は、ほぼ緑色に塗りつぶされた桃色の花が、眩しそうに遮っていた。

「お袋の療養のためでしか、なかったのにな。」

少年は、この男の存在を量りかねていた。

ただ、二人と一匹のための特別仕様の日傘がつくるこの空間は、とても居心地がよいと、そう思った。

「花婿はいい人か？」

時間がどれくらい経過したかは、よく分からない。ずいぶんとた

った気もするし、そんなことはない気もする。

不意をつかれたものの、少年は胸を張って答えた。少年にとって兄がどれだけ大きく、優しい存在であるかを。

しばらくして、おとなしく聞いていた男は、やや興奮気味の少年に向かつて、淡泊に。

「あつそ」

自分で聞いておきながらの、その反応だった。少年は最後までこの男を好きにはなれなかった。

いや、もう少し話していれば、もしかしたらほんの少し、違った結末を迎えることができたかもしれない。

しかし、結局そうはならなかった。その終止符を打ったのは、歩くのが好きで、でしゃばるのも同じくらい好きな、一匹の犬だった。犬が綱を引っ張り始めた。

「その犬にとつて、ここはもう帰る場所じゃないんだよ。これから、もといたところに連れて帰ってくれるさ」

少年は、不安だった。しかし、この男の言葉ならどこか信じてもいいような気がした。

「一言、嫁に伝えてくれないか？」

後ろから声がした。振り返ると、男は小さな小屋をどこかへと移動させていた。

「俺、元々いたところに帰るから。もう会うこともない」ってな、頼んだ」

「大丈夫じゃった？」

花嫁は少年の帰りが遅いのを心配して、門の前で待っていたらしい。少年の目から見ても、とてもきれいな人だった。

二人で犬を、小屋まで連れていく途中、少年は聞かれてもいないのによく喋った。散歩のこと、男のこと。犬に引きづられたという自分の汚点は、若干ぼかして伝えたのだが。

花嫁は男の話で、眉をやや寄せた。

「奉^{まつり}くん……木^{もく}さんは何か言うつた？」

聞いたこともない名前と苗字だったが、話の流れからして、きっと、図太く、どこか真っ直ぐなあの男のことだろうと、そう思った。犬を結んだ後に、男の言葉をそのまま伝えた。

「そうなんじゃ……そうだったんじゃ」

少年には、二人のことはよく分らない。もしかすると、この犬は分かっているのかもしれない。

犬はただ無言に水を飲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6135k/>

I f y o u w a l k w i t h t h e d o g

2010年10月8日15時04分発行